

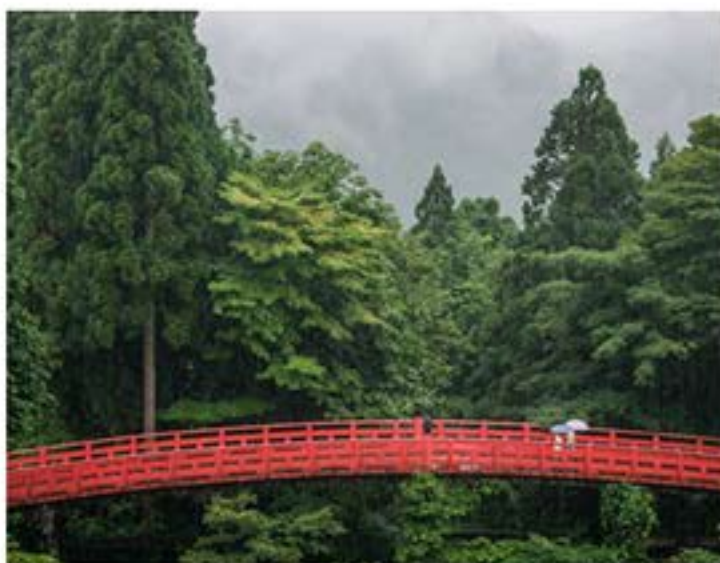


とやま、祭り彩時季【五】

芦崎寺に伝わる年中行事 写真・文／木原盛夫

とやま、祭り彩時季【五】

戸輪寺に伝わる年中行事 写真・文／本原盛夫



CONTENTS

- 開山伝説・・・・・・・・・・・・・・ 4P
- 立山信仰と芦峯寺・・・・・・・・・・・・ 10P
- 山の神の祭り・・・・・・・・・・・・・・ 13P
- おんば様のお召し替え・・・・・・・・・・・・ 22P
- お涅槃団子作り・・・・・・・・・・・・・・ 36P
- 涅槃会の団子撒き・・・・・・・・・・・・・・ 45P
- 春彼岸 ズズクリ・・・・・・・・・・・・・・ 53P
- 夏季例大祭 神輿練り・・・・・・・・・・・・ 69P
- オショウライ・・・・・・・・・・・・・・ 96P
- 布橋灌頂会・・・・・・・・・・・・・・ 108P
- 年餅作り・・・・・・・・・・・・・・ 123P
- ミヤマイリ・・・・・・・・・・・・・・ 131P

- 参考文献・・・・・・・・・・・・・・ 143P

○開山伝説

立山の開山は701年と言われ、伝説によれば越中国司・佐伯有若（ありわか）の息子・有頼（ありより）が阿弥陀如来の命を受けて開いたと言われている。それは、こんなストーリーになっている。

有頼が、父の白鷹を持ち出して鷹狩りに出る。しかし、途中で白鷹が逃げてしまい、有頼はあわてて白鷹を追いかけて山中に入っていく。

ようやく白鷹を見つけた所に、一頭の熊が現われ驚いた白鷹は再び逃げてしまう。有頼は持っていた矢を射ると、それは熊の左胸に突き刺さり、矢が刺さったまま熊は白鷹と同じ方向へ逃げ去った。

追いかけていた有頼が立山の山頂まで来ると、白鷹と熊は崖に空いた岩穴に入っていく。ようやく追い詰めたと思い岩穴に駆けつけると、そこには矢の刺さった阿弥陀如来が立っていた。



上：阿弥陀如来が現われた岩屋（玉殿岩屋）の入口から見上げた雄山。

下左：岩屋の内部、下中：雄山神社の神輿に付いている白鷹が描かれた華鬘（けまん）、下右：熊が描かれた華鬘。

驚いた有頼に阿弥陀如来は「多くの迷える人々を救うため白鷹になり熊になり、貴方をここまで呼び寄せた。どうか立山を開いて国中の人々が登拝できるようにしてくれないか」と話した。

感銘した有頼は、山を下り仏門に入り慈興上人となって立山を整備した。

芦峯寺の雄山神社（中宮祈願殿）の境内には有頼の墓所である立山開山廟がある。出家して慈興上人となった有頼が、天平宝字3年（759）6月7日に、生きながらに土穴に入定したと伝えられる。有頼83歳の時だという。

また境内の右奥には立山開山堂があり、国指定重要文化財である慈興上人の木像が祀られている。

尚、雄山神社は立山山頂にある峰本社、芦峯寺の中宮祈願殿、岩峯寺の前立社壇の三社で構成されており、県内に4つある越中国一宮の一つである。



7P：有頼の墓所である立山開山廟。

8P：立山開山堂と中に祀られている慈興上人の木像。

9P：雄山頂上にある峰本社。



○立山信仰と芦峯寺

地獄と極楽浄土が存在する霊峰立山。修験者は山に入り苦行を積むことで自らの罪や穢れを祓い清め、極楽往生を迎えられると信じられてきた。

また、立山信仰では女性は穢れた存在とされ地獄に墮ちるとされていた。しかし、立山は女人禁制であるため山に入り苦行を積んで身を清めることもできなかった。そのため、入山出来ない女人を救済出来るよう、登山に代わるものとして布橋灌頂会という儀式が作られた。

この立山の麓にある集落が芦峯寺で、立山信仰の拠点として最盛期には38軒の宿坊（33坊5社人）があり、衆徒らが農閑期に全国の檀那場へ布教に出かけていた。その時に用いられたのが、立山信仰のあらましを絵巻風に描いた立山曼荼羅だった。

明治初めの廃仏毀釈によって宗教村落としての存在は薄くなるが、以降も山岳ガイドや山小屋経営など山に携わる人は多く、山岳信仰や女人救済にまつわる年中行事が今も村人たちの手で行われている。





1 1 P：立山の地獄谷と血の池。

1 2 P：芦峯寺集落から見上げた立山。

○山の神の祭り

芦峯寺に春の訪れを告げる、山の神の祭り。猟師や山岳ガイド、炭焼き、伐採業者、山小屋、工事関係者など山に従事する男たちがその年の安全を祈願する伝統行事で、雄山神社の境内にある神秘社で毎年3月9日に行われる。

芦峯寺の行事は主に女性が中心となって世話をするが、山の神様は女で、女性が参加すると嫉妬し祟りがあるというので、この行事だけは男性のみで執り行われる。

昭和の頃までは村の当番組の男性たちが組頭の家を集まり夜を明かし、入浴して身を清めてからお供えの鏡餅を搗いた。まだ暗いうちに触れ太鼓を叩いてまわり、篝火を焚いて祭りの準備をしたそうだ。

現在お供えの鏡餅は市販のものを購入しており、触れ太鼓も今年（2018年）から廃止になった。過疎化で当番組の人手が足りないなどの要因もあり、祭りの簡略化は芦峯寺でも進んでいる。



14P: まだ暗い早朝、祭りの準備をする当番組の男性たち。

15P: 参拝に訪れた山の関係者。祭壇の前の甕に持参したお神酒を注ぐ。



5時頃には神秘社の前に篝火が焚かれ、5時半頃から一人二人と山に従事する人たちが参集し、それぞれが蠟燭を灯し、祭壇の前に置かれた甕に持参した徳利からお神酒を注いで参拝する。

6時になって空が少し白ばんできた頃、神事が始まる。例年なら宮司は社殿の前、外に出て修祓、祝詞奏上を斎行するが、あいにく土砂降りの雨になったため社殿の中で行った。



宮総代、氏子総代、組頭などが玉串を奉奠し、20分ほどで祭典は終了した。

神秘神社を下がったところにテーブルが出され、参列者にお神酒が振る舞われる。この山の神の祭りが終わると芦峠寺に春が来るといわれ、山に入っの作業が解禁される。



○おんば様のお召し替え

3月13日に閻魔堂で行われる、おんば様のお召し替え。衣食の恵みを与えてくれる豊穰の神であり、女性を成仏に導き守ってくれる女神でもあるうば尊（おんば様）の装束を、一年に一度感謝を込めて新しく作った装束とお取り替えする行事。嘗ては芦峠寺集落で栽培から織りまで行っていた麻布で装束を作っていたが、現在は木綿を使っている。

江戸時代以前から受け継がれてきた行事で、うば堂内部に中心となる3体と全国66カ国に因んだ66体の計69体のうば尊が祀られていたが、明治初期の廃仏毀釈でうば堂が取り壊され、現在は閻魔堂に6体、立山博物館に9体の合計15体があるのみだ。

朝8時半頃から「芦峠女性の会」と地元の老人会「白鷹会」の女性40人ほどが集まり、断裁された布に一針一針感謝の思いと無病息災の願いを込めて15体の白装束を縫う。





2 3 P上：閻魔堂。

2 3 P下：装束を縫う女性たち。

2 4 P：お堂に祀られている閻魔大王坐像





白装束が縫い上がると、一つずつビニール袋に入れ箱に仕舞う。その箱を風呂敷に包んで雄山神社の開山堂に運び、お祓いを受ける。





お祓いを受け、宮司の祝詞奏上の後、玉串を奉奠しお神酒をいただく。

10時頃から始まった開山堂での神事は30分ほどで終わり、再び太鼓を叩く女性を先頭に閻魔堂へ戻って行く。そして閻魔堂に安置されている、おんば様の装束を取り替える。



32



年に一度取り替えられるのは白装束だけで、
赤いタスキは汚れ具合を見て取り替える。
着せ替えが終ると、円隆寺（富山市梅沢）の
住職による読経が行われる。

33



○お涅槃団子作り

3月15日に閻魔堂で涅槃会が営まれ、法要の後にお涅槃団子が参拝者に撒かれる。その団子作りが、前日の14日に芦崎寺の公民館で行われる。

涅槃会とはお釈迦様が入滅した2月15日（芦崎寺では旧暦2月15日を新暦に換算して3月15日に行っているのだろう）に行われる法会で、お涅槃団子はお釈迦様の骨（仏舎利）を模したものだそう。これを拾うことで無病息災、厄除けを願う。

朝8時頃から始め、米粉5斗（1斗は15キロ）を使って作られる。お涅槃団子は赤、白、黄、緑、黒の5色のところもあるようだが、芦崎寺は色粉を入れないプレーンの白と、赤、黄、緑の4色が作られる。

作り方は、米粉に色粉を混ぜ、お湯を加えて練る。練った固まりを千切り、手のひらでくるくると丸める。丸めた団子を蒸した後、流水で洗って布の上に広げて扇風機を当てて乾かすといった手順だ。



and more...